



「紫式部日記」は、彼女が女房として仕えていた中宮彰子の出産が迫った1008年秋から1010年正月にかけての諸事が書かれており、史書では分からない人々の姿や、当時の宮廷の女性たちの華やかな世界が生き生きと書かれている。

式部が仕えた中宮彰子は平安時代を代表する藤原道長の娘で、彰子が生んだ敦成（あつひら）親王は後の一条天皇、道長はまさに栄華への階段を登ろうとしていた時である。

一方、式部はこの時「源氏物語」を数年前に完成しており、彰子の家庭教師でもあった式部は道長にとって特別な存在でもあった。

今回のポコアのテーマは京都、平安朝の京都を訪れたいと思い、「式部日記」の一部を紹介してみたい。時は平安中期の1008年秋、場所は寺町通りの道長の邸宅、「土御門邸」、この時、道長44歳、式部36歳、それぞれの人生の曲り角に居た。

その朝、お庭にはうっすらと霧がかかっていましたが、私が渡り廊下の戸口のそばの部屋からお庭を見ていると、霧の中から殿（道長）が歩いてこられ、お庭の女郎花の一枝を折って、几帳（きちょう）越しに私に下さり、こう仰ったのです。

「私の方が早起きでしたね。でもこの花の歌は遅くなってはいけませんよ」

私は寝起きの顔の見苦しさが恥ずかしく、素早く硯の上に身を寄せると

『**をみなえし さかりの色を見るからに 露のわけける身こそ知るられ**』

すると、私の歌を見られた道長様は、「おお、早いですね」とにっこりされ、筆を取られると、次のような御歌を返して下さいました。

『**白露は わきてもおかじをみなえし ころからにや色の染むらむ**』

私は道長様の歌にますます恥ずかしく、消える思いでございました。「女郎花の新鮮な色をみますと、盛りを過ぎた自分が哀しく思われる」という私の歌に、道長様は「女郎花が美しい色に染まっているのは、何も盛りだからではありませんよ。自分が美しくなろうとしているからじゃないですか」と、言って下さったのですから。

26日、お練香の調合の後、中宮さまはそれを女房達にもお配りになられました。お香を丸めていた人々もお裾分けにあずかるうと、集まっておられました。

中宮さまの御前から下がって部屋へ戻る途中、宰相の君の部屋の戸口をちょっと覗いてみると、ちょうどお昼寝をなさっている時で、萩や紫のとりのりの色目の衣の上に、濃い紅の艶やかな打衣を上を覆って、小机の上に頭をもたせていられる。その顔のあたりがとてまあやかで、可愛らしく見えたので

「まるで物語の中のお姫さまのようですよ」と言うと
「意地悪ななさり方ですね。寝ている人を思いやりもなく起こすなんて」
と、あげられたお顔が少し赤らんで、また美しい。

中宮さまに御忌戒をお受けいただくために、髪を形ばかりお削ぎしました時は、どうしたわけか不意に、悲しくなったものでございます。でも中宮さまは無事に御出産なさって、広い母屋から廂の間、縁の欄干あたりまで立て込んだ僧侶や俗人たちは、一段と大声をあげてお祈りをし、深々と礼拝致したのでございます。

東面の間にいる女房たちは殿上人にまじって控えていましたが、小中將の君が、左の頭中將・源頼定様とばったり顔を見合わせてしまった様子などは、後になって皆で思い出しては笑ったものでございます。この小中將の君も日頃は美しい人でございますが、その日は涙で化粧崩れが目立つような有様でございました。でも、それ以上に私の顔はどうなっていたのか心配でしたが、この時は常ではなく、お互いに見た女房衆の様子を誰も覚えておられなかったのは、私には幸い致しました。

いよいよご出産あそばすという時に、物の怪(もののけ)悔しがって喚きたてる声は何とも気味の悪いものでしたが、阿闍梨(あじり)たちが物の怪に引き倒されて気の毒だったので、さらに念覚阿闍梨(ねんがくあじり)をお呼びなされて大声で祈祷するといったような次第でございました。これは阿闍梨たちの効験が薄いのではなく、それほど物の怪の力が大きかったのでございます。

正午になると空が晴れて、まるで朝日がさし出したような気持ちで、ご安産に加えて男御子様でいらっしゃるお慶びは、それはもう並一通りのものではございません。昨日は心配で泣き濡れて過ごし、今朝のうちは秋霧にむせび泣いていた年若い女房たちはそれぞれの局に下がって休み、中宮様の御前にはこのような折に相応しい人たちが付き従っておりました。

(何日か後の)夜、月がまことに美しく、その上季節も風情の或る頃でしたから、若い女房たちは舟に乗って遊ばれたのでございます。色とりどりの衣装よりも、皆同じ白一色の衣装も、お顔や髪の様子がはっきり見えて、美しいものでした。

小大輔の君、源式部の君、五節の弁の君、右近の君、小兵衛の君、馬の君、やすらい、伊勢人などが端に座っているのを、左宰相中將と子息の中將の君がお誘いになって、右宰相中將が棹をさされる舟に乗られたのでございます。

その時でございました。北門の辺りに牛車が沢山詰め掛けてきたのでございます。それは藤三位の君をはじめとして、侍従の命婦の君、藤少將の命婦の君などの内裏の女房たちが、中宮様の若宮出産のお祝いに見えられたのでございます。

舟に乗っていた女房たちはあわてて家の中へ入ったのでございますが、殿は何でもないご様子で、内裏の女房たちに冗談を仰ったりして、それぞれの身分に応じた贈り物をお与えになっておられました。

十月の半ばになってもまだ御帳台からお出ましにならないので、私たちは東母屋の西の御座所の側で、夜も昼も控えておりました。殿が夜といわず昼といわず、御乳母の懐の若宮を覗きにお出でになり、乳母が気を許して寝ている時などは、驚いて目を覚まされて本当にお気の毒です。でも殿が御自分だけはいいい気分、若宮を抱き上げてお可愛いがりになるのも、仕方のないこととごさいます。

また或る日など、若君が殿にとんだことをおしかけになったのを、殿は直衣(のうし)の紐を解いてお脱ぎになり、御几帳の後ろで火にあぶって乾かしておられました。そして「あはれ、この宮の御しとに濡るは、うれしきわざかな」と、お喜びになられて、女房らは皆、笑いあったものでごさいます。

行幸の日が近くなったというので、お邸のうちを一段と手入れをいたしました。色とりどりに美しく色変りした菊を眺めたり、黄色が今盛りの菊を眺めたりしていますと、老いがどこかへ退散してしまうと言いますが、いっそ風流好みに若々しく振舞うことが出来たらどんなにいいかと思ってしまう。

でも、結構なことや面白いことを見たり聞いたりしましても、常々心がけてきた出家遁世の気持ちに引き付けられるばかりで、憂鬱で嘆かわしいことばかりが多くなり、苦しくなるのでごさいます。

そして夜明け頃、ぼんやり外を眺めて、池の水鳥が何の物思いもなさそうに遊びあっているのを見ていると

「水鳥を 水の上とやよそに見む 我も浮きたる世を過ごしつ」

あんなに楽しそうに遊んでいる水鳥どもも、その身になって考えてみれば苦しいこともあるのだらうと、つい吾が身と思ひ比べてしまうのでごさいます。

「あなたは評判の人だから、きっと沢山の男たちが声をかけてくるでしょう」

殿が、私が書いた「源氏の物語」をご覧になってこんな意味の御歌を下さったんです。ですから、私、少し腹が立って

「どなたなんでしょう、評判の女だなんて仰っているのは。わたしはどなたにも靡いたことなどごさいませんのに……」

或る夜のことでごさいました。私が渡殿の自分のお部屋で寝ておられますと、トントンと部屋の戸を叩く音が聞こえてまいりましたが、私は恐ろしいのでそのまま答えもしないで夜を明かしてしまいました。すると、その翌朝、殿が御歌を下さったんです。

「夜もすがら 水鶏(くひな)よりけになくなくぞ まきの戸口にたたくわびつる」

思った通り、昨夜の人は殿だったのです。で、私は

「ただならじ とばかりたたく水鶏(くひな)ゆえ あけてはいかにくやしからまし」

そうですよ。あんなにもただごとではなく叩いておられたのですもの。開けてしまったらきっと後悔していましたよ、殿も私も……。 (おわり)

5月13日 磯城の道を歩く

名張にも観阿弥の生誕地伝承があったんです。

実は五月の磯城の道の冊子にある高田さんの「面塚」の翁の写真、こんなところあったかなあと考えていたんですが、これ、高田さんが名張で撮って来られたんですね。面白い。何か調べ始めると次々に疑問が湧いてきて放っとけない。まあ、人にもよるんでしょうが、高田さんはそういう人なんでしょう。

ところで面塚なんですが、大和郡山にもあるのを、最近地元の歴史の会で教えて貰いました。「この塚にも面が降ったというが、こちらはおおらかで古い能面が現存している」と関連の本に。考えてみたら、能面といっても物ですから土の中に埋まっても不思議ではないんですが、それが能面だったら人々に何か超絶した思いを抱かせて天から降ってきたという伝承になったりするんでしょうか。こちらの面塚は国道(25線、ついでにいうと昔の竜田道)脇のマクドの隣で、ネギではなく、ハンバーグと一緒に降ってきたということです。



平城京天平祭

三宅町のアザサは咲いてはいましたが、まだ小さかったですね。これでは「黒き髪に 真木綿もち あざさ結び垂れ」たとしても、遠めには髪の毛に花びらが散っているようにしか見えません。蓮と同じように水生の花は梅雨時分にならないと駄目なんじゃないでしょうか。そのかわりに、この万葉歌に曲をつけた小島さんの素敵な歌が聞けました。今度はポコア・ポコの女性合唱団でどうでしょう。

ところで、万葉歌碑のところでは三宅町のボランティアの人に会いましたが、中に一人、万葉衣装の女性がいたのを覚えておられますか。先日、平城京天平祭で天平行列の催しがあって、それによると最近の研究では、万葉衣装といっても、額田女王や持統天皇の明日香時代、元明、元正の奈良時代初期、光明皇后の中期、孝謙天皇の晩期というふうに微妙に違うようです。確かに高松塚の女性の衣装は朝鮮風で、奈良時代の女性と全く違いますが、普通のイベントで登場するのは奈良時代の衣装で、高松塚の女性はあまり登場しないようです。(写真は平城京天平祭のもの)



会長の麻殖生さんの説明には感心しますが、麻殖生さんとは7人家族の大家族らしいですね。何となく考古学に打ち込んでる人というのは小家族の静かな家庭を想像するのですが、考えてみたら大家族のほうが一人で気軽に歩けられそうですね。でもまあ、あまり打ち込みすぎて、お孫さんに「おじいちゃんは古墳で寝たら」とか言われないように、気をつけて下さい。

いい天気でしたが暑くなりました。91歳の さんも久しぶりに参加されました。それにしてもお元気ですね。次回も是非一緒したいです。